我々自身と同じような神の子
Cormac McCarthy の *Child of God*(1973)における語りについて

山　野　敬　士

Vereen Bellは、Cormac McCarthy(1933 —)の初期作品に共通する特徴について次のように述べる。

> Ordinarily the omniscient narrator in McCarthy's novels is recessive — merely narrating — and the characters are almost without thoughts, certainly without thought processes, so neither narrator nor characters offer us any help with the business of generalizing. (4)

このような、「ただ語っているだけ」という語り手と思考の欠如した登場人物の存在が作品の解釈を困難にするという図式は、*Outer Dark*(1968)とならんで *Child of God* に最も顕著に見ることができる。しかしながら、Robert L. Jarrettが指摘するように、この語り手の存在にもかかわらず、残酷な犯罪者である主人公Lester Ballardに対して、読者が奇妙な "a grudging sympathy" (35)を抱いてしまうのも事実であるように感じられる。

本論では、*Child of God* の語りに極めて特徴的な「三人称の語り手が我々読者に対して呼びかける声」と「不特定の一人称の語り手が不特定の聞き手に語っている声」に注目することで、語り手と読者の関係が作品読解にどのように影響するかを考察してみたい。

I.作品の前半部— 呼びかけの声と一人称の語り手

Child of God の三人称の語り手は、一般総称の "you" を多用する。この "you" は、一人称による語りのように、ある人間によって物語が実際に語られているという印象を強調しながら、「読者に対して呼びかける声」として機能していると考えることができる。作品中最初の呼びかけは、Lesterが登場する場面の "A child of God much like yourself perhaps" (4) である。「たぶんあなた自身と同じような神の子」と呼びかけられることで、読者はこの平等主義的な発言と今後作品が明らかにするLesterの残虐行為との間を揺れ動くこととなる。

Jarrettは“child of God”という言葉と読者の関係について、“McCarthy's title places his readers in a quandary: to deny Lester's humanity − his status as a “child of God” − jeopardizes not only our egalitarian ideology but our notions of our own humanity”(37)と述べている。このような解釈は、Lesterの残虐性が、すべての人間に共通するもの（暴力性や性意識等）と認識される可能性に基づいている。しかしながら、読者は「我々はここまで酷くない」と考えることで、Lesterの特異性、異常性を指摘することもできる。この美的判断と道徳的判断の分離という点から“child of God”を考えるとき、それは、Jarrettが考察する以上に曖昧で複雑なものとなるであろう。作品のタイトルでもあるその言葉が、読者に対して呼びかけている声の中に用いられていることの方が、より重要なのである。それは、呼びかけることで「読者」を明確に設定するわけであるから、本質的に現実と虚構の境界線を設定するもののはずだ。つまり、Lesterを虚構の中の人物と考察する理由として機能するはずのものである。しかし、その声の内容、“a child of God much like yourself”は、現実世界を虚構世界に導入することを要請するものでもある。つまり、呼びかけるという形式は、読者が美的判断と道徳的判断を分離して考えることを可能とするが、声の内容は、その不可能性を読者に認識させようとするものなのである。

呼びかけの声が持つ、この不思議な力を端的に表現している別の例を挙げてみる。性的に奔放な娘達に苦悩しているゴミ収集業者を訪ねたLesterは、その娘の一人から性的なからかいを受ける。“He had eyes for a long blonde flatshanked daughter that used to sit with her legs propped so that you could see her drawers.” (28)　Lesterの視点から始まるこのsexualな文の最後に“you”を使うことで、語り手は、我々の視点を強引にその場面に設定しようとする。Lesterは、車中の男女を覗き見ることを契機に性犯罪に手を染めるようになるのだが、この呼びかけの声は、Lesterと同じvoyeurとしての視点を設定されることに読者が抗うことを不可能なものとしてしまうのである。そして、結果としてその声は、“a child of God much like yourself”が引き起こしたのと同じ状況に読者を陥れてしまうのである。

McCarthy作品を虚無的で反解釈的であると捉える批評に対して、Edwin T. Arnoldは“a profound belief in the need for moral order, a conviction that is essentially religious”(44)が作品中に存在すると異論を述べる。しかし、*Child of God*においては、「道徳的な秩序や本質的に宗教的な信念の必要性」が、

作品に内在されているというよりむしろ、呼びかけの声と読者の関係によって喚起されるように感じられることの方が、より興味深い。そして、その「道徳的秩序の必要性」を巡る読解は、これまで見てきたように、常に二律背反的状況に追い込まれるのである。

三人称の語り手は、基本的にLesterに対して同情的であると言える。呼びかけの声を使うことで、美的判断と道徳判断を分離することが困難な状況を作り出した語り手は、Lesterの残虐性を客観的に描きながらも、それをinnocentなものやamoralなものとして提示することで、読者のsympathyを引き出そうとする。この意味で極めて興味深いのは、Lesterが好意を寄せる女性の白痴の赤ん坊である。南部のある地方では、白痴の子供を“child of God”と呼ぶそうだが[1]、その意味では、Lesterは善悪のシステムが無化される地点に立つものとして描かれていると言えるかもしれない。二人の“child of God”が出会う場面は、次のように描写される。

> It didn't look. A hugeheaded bald and slobbering primate that inhabited the lower reaches of the house, familiar of the warped floorboards and the holes tacked up with foodtins hammered flat, a consort of roaches and great hairy spiders in their season, perenially benastied and afflicted with a nameless crud. (77)

床を這う赤ん坊のgrotesqueな姿が、極めて難解な語彙で語られるこの場面において、childやbabyではなく、「霊長類」と「大司教」という２つの意味を持つ“primate”という言葉が使われている。そしてそれは、“child of God”と同様の意味の二重性を読者に意識させる。この後、この赤ん坊はLesterから手渡された生きた鵝の両足を噛み千切ってしまい、口の周りを血だらけにして再登場するが、それに対してLesterは、“He wanted it to where it couldn't run off”(77)と述べるのである。彼と白痴の子供の関係性によって、無垢なものが持つ残虐性とLesterの犯罪（殺害した女性達の死体との共同生活）との関連性が暗示されることで、読者はLesterの犯罪の動機を推測すると同時に、それに共感を覚えてしまうのである。

また、語り手はLesterの犯罪性を社会的・歴史的文脈に広げること、つまり“child of God like yourself”が成立する社会を作り出すことで、同様の操作を

行っている。Lesterが静かな町に起こした騒動は、彼の異常な性意識が生み出したものである。しかしながら、ゴミ処理場のエピソード（様々な男達がそこにやって来ては、娘達と性交渉を持つことで、父親が知れない子供が増殖していく話）は、町が静かな表層の下に隠し持つ、罪深い性意識を極めて明確に象徴している。このように考えると、町の保安官が、まだ何の罪も犯していないLesterを見つけた時にかけた、"What sort of meanness have you got laid out for next. . . . I guess murder is next on the list ain't it?" (56) という言葉は、その保安官の名前が象徴的にも "Fate" であることと合わせて、共同体の暗黒面を体現する人間としてのLesterが、個人を超えた運命によって動かされたという解釈を可能とするのである。[2]

作品前半部の語りが保持する、もう1つの特徴は、一人称の語り手が複数存在することにある。これらは前半部にのみ配置され、作品の舞台となる町に住む名もない人間達が、主にLesterについての彼らの記憶を語るという設定で、三人称の語りの中に埋め込まれている。これらの語りは、一義的には、Lesterに対する町の道徳的感情を表現していると考えられる。例えば、Lesterが少年時代に自分の命令に従わなかった子供を激しく殴打したところを目撃した男は、"I never liked Lester Ballard from that day. I never liked him much before that. He never done nothing to me" (18)と語る。

ここで興味深いのは、三人称の語り手から独立し、それと対峙しながら道徳観を提示するはずであるこれら一人称の語りも、三人称の語り手が用いた「社会的コンテクストへの拡大」という企みのように感じられることにある。第一に、彼らの「語る」という行為は、排斥したはずのLesterを、神話的な存在として皮肉にも再度取り込むことに他ならないからだ。抑圧していたもの、死者が蘇ってくるというゴシック的主題は、Lesterの残虐行為や洞穴での狂気の生活様式以上に、「語る」という行為の中に維持されていると言えるのである。

一人称の語り手には、Lesterの思い出から脱線して、別の話を始める者も数多く存在する。自分の妻の葬儀で "chickenshit blues" なる歌を歌った老人の話、祭りで鳩を撃ち落とす射的の名手が、実は鳩の尻に花火を埋め込むことで撃ったようにみせかけていたという話、大きな猿と喧嘩をする見世物に出て、最初は大人しかった猿を挑発していると、物凄い力で攻撃され大怪我をした男の凄惨な思い出、Lesterの祖父がK.K.K.の原型であった "White Cap" の構成員であったという話などが、次々に語られる。それらはすべて、町の異常性、虚偽性、無

垢なものの暴力性とそれを煽る力に結びつけられることが可能である。そして、町全体の歴史に集合無意識的悪夢として存在する暴力性も、Lester の犯罪の背景や過程の metaphor となり、その責任を社会・歴史の中に拡散しようとする三人称の語り手の意図と呼応するのである。

しかしながら、一人称の語り手達は、"child of God" としての Lester を否定する発言も行う。この点において、彼らは、三人称の語り手とは明確に異なる位置を占めているとも言える。"chickenshit blues" を歌う老人について語る男は、"But he wasn't a patch on Lester Ballard for crazy" (22)を最後に口を噤み、Lester の祖父の話は、"I'll say one thing about Lester though. You can trace em back to Adam if you want and goddamn if he didn't outstrip em all" (81) という言葉で締めくくられる。「すべては神の子」という普遍的な人間性に還元できない Lester の個別性は、彼らの言葉によって生き残るのであり(それ故に、Lester は神話的に語り継がれるのである)、読者は一人称の語り手の声を聞くことで、普遍性と個別性の間を揺れ動かされることとなる。このように考えると、「呼びかけの声」と「一人称の語り手」という二つの相反的な声(更に複雑なことに、それら自身が、内部に自らに相反する力を保持している)を聞く読者は、内側からの反駁により破壊されてしまうような地点においてのみ、Lester を解釈することが許されていると言えるのである。

II. 作品の後半部 — 呼びかけの声と語るということ

象徴的にも、一人称の語りは "You all talk about him. I got supper waitin on me at the house" (81)という言葉とともにその姿を消す。そして、それは、Lester に同情的である三人称の語り手が作品を支配することの始まりでもある。語り手は「無垢なものが持つ曖昧性」を駆使することで、読者の Lester に対する感情を操作する。失われたもの(土地・家族)を取り戻そうとする Lester の行動は、*The Great Gatsby* の grotesque な変形[3]と言える様相を *Child of God* に与える。第2章の冒頭で、Lester はカーセックス中に一酸化炭素中毒で死亡した男女を発見し、女性の死体を強姦し、廃屋に連れ帰る。この異常な性愛は、"He poured into that waxen ear everything he'd ever thought of saying to a woman" (88)という世間知らずで幼稚な Lester の姿により、その異常性が希薄なものにされ、"Who could say she did not hear him?" (88-89)

という恐ろしい言葉に繋がることで、無理やりに正当化される。語る声を持たない死体の特徴は、皮肉なことに凶悪な性犯罪者Lesterへの同情を述べる語り手の後ろ盾として機能し、読者のLesterに対するsympathyを誘発するのである。

母親が男と逃げ、その直後父親も自殺したLesterにとって、射的ゲームで獲得したぬいぐるみ（これも、幼児性・無垢の象徴であると言える）と、女性の死体は彼が喪失した家族像の不気味なparodyである。

> He took off all her clothes and looked at her, inspecting her body carefully, as if he would see how she were made. He went outside and looked in through the window at her lying naked before the fire. (91-92)

「女性の死体が何でできているかを見るかのようにそれを調べた」というLesterの子供っぽい好奇心を通して、その異常な性愛は語られ、「一旦外に出て窓から暖炉の前に横たわる裸の女性の死体を見た」という動作の中に、「家族」というものに対する彼のinnocentな欲求が強調される。このような無垢の象徴としての幼稚さと家族像に対する憧れは、Lesterの残虐性が増すのと比例して、より頻繁に用いられるようになる。彼は洞窟の中で星を眺め、"what stuff they were made of, or himself" (141)と考える。そして、夢を見る彼は、"he'd hear his father on the road coming home whistling" (170)と語られるのである。

語り手と読者の関係を考える場合、Lesterに対してsympathyを抱くよう読者を操作する語りが、「呼びかけの声」や「一人称の語り」と同様、相反する力をその内部に保持していることに注意することは極めて重要である。それは、語り手がLesterの犯罪性を希薄にするために選択した語りが、極めて女性嫌悪的であることに原因があると言える。このような語りについて、Nell Sullivanは"The narrative misogyny that excludes live women from the text also allows the projection of guilt onto the victims themselves, a sort of blaming of the victim" (75)と述べるが、三人称の語り手は「被害者の女性にも罪があった」と言わんばかりに殺害された女性達を描写する。Lesterが最初に手に入れた女性は、Lesterに殺されたのではなく、カーセックスの最中に既に死んでいた。そして、Lesterが隠れ家の中を引きずりまわす女性の死体は、自分の意思で屋根裏に上っているかのように語られるのである。

> She rose slumpshouldered from the floor with her hair all down and began to bump slowly up the ladder. Half-way up she paused, dangling. Then she began to rise again.(95)

白痴の子供の母親を殺害したLesterは、家にその白痴の子供を残したまま火を放つ。Lesterと白痴の子供の関係性以上に、彼の残虐性が強調されるこの場面の冒頭、家の中に入れてくれとせがむLesterを前にした女性を、語り手は"She thought about it before she swung the door back. You could see it in her eyes. But she let him in, more's the fool" (116)と描写する。「どうなるかわかっていたはずなのにLesterを中に入れた。馬鹿な奴だ」という、この女性蔑視的発言は、読者への呼びかけの声と並置されている。それにより読者は、語り手とLesterに対するsympathyを共有することが、女性嫌悪の感覚を語り手と共有することに繋がらざるを得ないことを認識することとなる。結果として、Lesterの道徳性を巡る議論は、この"narrative misogyny"を駆使する語り手に対する道徳的判断と二重化され、語り手の信頼性への疑問へと繋がることとなり、"child of God"に関する道徳的議論と同じように、読者は自分達の立場を自ら問わざるを得ない地点に立たされるのである。

この、語り手と読者の距離に関する問題は思わぬ結論へと辿り着き、読者による"child of God"の判断を巡る旅も急転回を迎えることとなる。大雨により氾濫した川が町を襲い、Lesterは激しい流れに押し流される。寓話的で、ある種神話的でもある*Child of God*に相応しいと言えるこの場面において、語り手は溺れるLesterを次にように描写する。

> He could not swim, but how would you drown him? His wrath seemed to buoy him up. Some halt in the way of things seems to work here. See him. You could say that he's sustained by his fellow men, like you. Has peopled the shore with them calling to him. A race that gives suck to the maimed and the crazed, that wants their wrong blood in its history and will have it. (156)

語り手は、呼びかけの"you"を使って、Lesterを溺死させることが不可能で

あることを読者に認識させようとする。それは、Lesterにsympathyを持っていた読者も、Lesterを道徳的に判断することを望んでいた読者も、三人称の語り手と距離を取り始めた読者も、Lesterのこの場面における死を望まないことを見透かしたような、意地悪な問いかけである。語り手は“You could say that he's sustained by his fellow men, like you”とさらに読者に呼びかける。第１章で考察した、呼びかけの声が持つ不思議な力（虚構と現実の境界線を設定すると同時に、それを飛び越えることを要請する）が、更に明確な姿をここに現すと言えるだろう。語り手は、Lesterを救出するという願望を読者の中に強引に設定し、その願望を体現する人間達を「お前のような奴ら」と呼ぶことで、Lesterを救出するのは読者だと宣言するのである。そして、これまでLesterに対する読者のsympathyを誘発してきた語り手は、読者と同一視される人間達を「狂った者と不具になった者を助け、歴史の中に間違った血を望む人間」と批判することで、読者を裏切るのである。

実際、この場面の直前に置かれたLesterの最後の殺人では、語り手は彼をただの凶悪犯としてのみ描いている。そこには、無垢な魂を暗示するような箇所はなく、ただ狡猾で凶悪な男の残酷な行動が客観的に語られているだけである。その変化を読者に意識させた上で、語り手は川岸の場面で、Lesterを救出した責任を読者へと振り向ける。一人称の最後の語り手が、“You all talk about him. I got supper waitin on me at the house”と言って姿を消したのと同様に、三人称の語り手は、自ら読者と距離を取ってしまうのである。小説の最初から、用意周到にも、自分も含めた「我々のような神の子」ではなく、「あなたのような神の子」と読者に呼びかけてきた語り手は、ついには、その呼びかけの声を使って、自分自身を道徳的に判断しなければならない地平に読者を連れ出すのである。

道徳的判断の必要性を認識し、その責任がLester個人から共同体の人間や歴史に拡散していくのを考察する中で、三人称の語り手に対する猜疑心を意識するようになった読者は、皮肉にも、自分がそれらと同じ位置に立たされていることに驚愕することとなる。このように考えると、怪我をして病院に収容されたLesterを連れ出し、洞穴中の死体まで案内させようとした男達も、川辺に集まった人間達と同じように、読者の分身と考えることができるかもしれない。なぜなら、今や読者は、三人称の語り手以上にLesterの罪をどう浄化するかを意識しなければならなくなったからである。しかしながら、彼らは洞穴の中でLesterを見失い、暗闇の中で恐怖に慄きながら叫びあうだけである。ある男は、

皮肉にも次のように叫ぶ。

> I know what we've done. We've rescued the little fucker from jail and turned him loose where he can murder folks again. That's what we've done. (186)

この叫び声は、「お前が助けた」という三人称の語り手の言葉と呼応する。そして、読者は、"child of God" を巡る議論に突然に持ち出され、責任を追求されることとなった自分たちの姿を、洞穴の中で混乱する男達の姿に、再び重ね合わせることとなるのである。

Lesterは、洞穴を3日間さまよった後、地上に姿を現わす。このエピソードは、Lesterが生まれ変わったことを示すmetaphorとして機能していると言えるであろう。赤泥が堆積する洞穴内は、人間の体内器官と類似したものとして描かれ、Lesterは "He'd cause to wish and he did wish for some brute midwife to spald him from his rocky keep" (189)と考える。 Lesterは、教会のバスから外を見ている男の子と目を合わせ、その子が自分に似ていることに激しい戸惑いを感じる。「無垢なもの」のimageと何らかの浄化を示唆するものが結実したこの場面の後、彼は病院に戻り、"I'm supposed to be here" (192)と語る。Lesterが自らを理解し処罰することで、ある種の浄化は行われると言える。しかし、読者がその浄化の感覚の中に、道徳的解釈の終点を見つけることは不可能である。

洞穴から死体を回収した保安官達の車の前を、ヨタカが飛び回るという印象的なending sceneに関して、Bellは次のように述べる。

> There is the slightest hint in those hawks at the end that it is Lester who is at home and we, the normal ones, who are estranged. Throughout the novel McCarthy has sustained for us the odd illusion that Lester is somehow mysteriously forgiven.(68)

Bellが指摘する、浄化の可能性とironyが読者の中に紡ぎだすこの奇妙な感覚は、Lesterの罪の浄化が、三人称の語り手により道義的責任を問われた読者の感情の浄化には本質的には繋がらないことと関係しているのである。

His head was sawed open and the brains removed. His muscles were stripped from his bones. His heart was taken out. His entrails were hauled forth and delineated and the four young students who bent over him like those haruspices of old perhaps saw monsters worse to come in their configurations.(194)

病院で病死したLesterは、研修医達によって解剖される。彼が生前、無邪気に考えていた「自分は何でできているのだろうか」という疑問は、Lesterを読む行為の中で生じた読者の疑問でもあるだろう。しかし、解剖された彼の死体は、彼の無邪気な願望だけを叶えるものである。彼の臓器は投げ出され、スケッチされる。その臓器の上に屈み込んだ研修医達は、生贄にされた動物の臓器を使って占いを行う古代の腸ト僧、"haruspices"として描かれる。そして、彼らはLesterの臓器から"monsters worse to come"を予言するのである。死者が蘇ってくるというゴシック的要素が再び示されるこの場面は、「読む」という行為が最も強調される場面でもある。死者Lesterは、一人称の語り手の語りの中と同様に、研修医達の読む新たな物語の中に現れるのである。

自分達が「呼びかけの声」に反応しながら行ってきた行為は、この研修医達の占いと同質のものだったのではないかという感情が、核心を棚上げにされたような感覚に陥らざるを得ない状況の中、読者の中に湧き上がる。現実を読み、それを語るという、人間に不可欠な行為に対する可能性と不可能性、そして、その現実さえも物語の形でのみ立ち現われるのだという感覚は、読者がLesterの物語に行ってきた解釈の可能性と不可能性と連動しており、それは、巧みに読者を操作してきた作品の語りが、読者に提示したこのironicな結末に凝縮されていると考えることができるのである。

注

本稿は2002年6月15日に行われた中・四国アメリカ文学会第31回大会での口頭発表に加筆、修正したものである。

1 See, Bell 68.

2 Arnoldも、共同体との関係からLesterを"the scapegoat that embodies

their weird alienation and stoked violence but also their terrible sadness, their potential nothingness" (55)と考察している。

3 McCarthyの作品が、Melville、Faulkner、O'Connorといった作家に影響を受けている可能性は、頻繁に指摘されてきた。しかし、Barcley Owensが、「緑の光」の共通性から*Cities of the Plain*(1998)と*The Great Gatsby*の関連性を指摘したことを除けば(102)、FitzgeraldとMcCarthyとの関連は議論されてこなかった。しかしながら、「喪失したものを取り戻そうとする意思」という中心的主題を*Child of God*が保持していることや、「ごみ捨て場」が重要な役割を果たしていることを考慮に入れると、上記の作家にFitzgeraldを加えることは的外れなものとは思えない。

Works Cited

Arnold, Edwin T. "Naming, Knowing and Nothingness: McCarthy's Moral Parables" in *Perspectives on Cormac McCarthy*. ed. Edwin Arnold and Dianne C. Luce. Jackson: University Press of Mississippi, 1993. 43-67.

Bell, Vereen M. *The Achievement of Cormac McCarthy*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1998.

Jarrett, Robert L. Cormac *McCarthy*. London: Twayne. 1997.

McCarthy, Cormac. *Child of God*. New York: Vintage. 1973.

Owens, Barcley. "Thematic Motifs in *Cities of the Plain*" in Modern Critical Views Cormac *McCarthy*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2002. 95-112.

Sullivan, Nell. "The evolution of the dead girlfriend motif in *Outer Dark* and *Child of God*" in *Myth, Legend, Dust: Critical Responses to Cormac McCarthy*. ed. Rick Wallach. Manchester: Manchester University Press. 2000. 68-77.